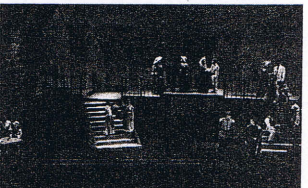


オペラ・声楽・合唱



三上桂子+ラルフ・デーリング



渋谷シティオペラ「カルメン」(3枚共)

◆井上静香ヴァイオリン・リサイタル

新潟出身、現在紀尾井シンフォニーエッタ東京のメンバーでもあり、桐朋大卒業後ソロやアンサンブルなど内外で多彩な活動を見せる若手ヴァイオリニスト井上静香がソロデビューリサイタルを飾った。

フランス在住の新進成嶋志保のピアノにより、前半はまずタルティニ/ソナタ・ト短調「悪魔のトリル」をクライスラー版で。これはピアノスト共々、しつとりした典雅な音色による情緒纏綿とした演奏になり、次のバルトーク/無伴奏ソナタも緊

張感に満ちた錯綜した音楽が丁寧で精緻に弾かれていた。後半はまずシューベルト/ソナタイ長調「デュオ」で、二人の呼吸がピッタリとマッチし、のびやかでシューベルトの歌心が活かされていた。最後のブラームス/ソナタ第3番ニ

短調も速いテンポで熾烈に弾かれた第1楽章や朗々と歌ったアダージョなどかなりの名演で、フィナーレの狂気も素晴らしい。アンコールのエルガー「朝の歌」もすつきり弾かれたなかなかの美演。(7月17日、東京文芸会館小ホール) (浅岡弘和)

◆三上佳子&ラルフ・デーリング

ソプラノの三上佳子は国立音大からウィーンのコンセルヴァトリウムに学び、卒業後はオペラ、コンサートに活躍。一方バスバリトンのラルフ・デーリングは永くオペラ、オラ

トリオで活躍、現在はリート中心に活動するドイツの名歌手。共演は今回が三度目。前半はバッハの農民カントーラ全曲。「百姓娘とその恋人の会話をアリア、レチタティーヴォ、重唱で表現する。三上はディアンドル(チロル地方の民族衣装)を身に

付け表情豊かに歌い上げ、デーリングがこれに陽気に答えるという楽しいもの。30分があつという間だった。後半最初、三上のヤナーチェクのモラヴィア民謡集。声にくくつもの色を持ち、とくに要所で見せるノンビブラートのポルタメントが何とも

チャーミング。続くデーリングの「冬の旅」からの3曲はさすがの洪さで圧巻。その後の日本歌曲、シュエマンの二重唱も終始息の合った演奏が心を和ませた。ピアノの篠宮久徳も好演。(6月19日、JTアートホールアフィニス) (小池潤一)

◆オーケストラと歌う

市民合唱コンサート

作曲家兼指揮者平井秀明が東京ニューフィルハーモニック管弦楽団と八王子市民から公募選抜された140名の市民合唱団を振って、日本の唱歌や合唱曲、そして得意のドヴォ

ルザークを演奏した。第一部はまず混声合唱のための唱歌メドレー源田俊一郎編「ふるさとの四季」。「故郷」「春の小川」「朧月夜」などの懐かしい歌が雄弁に歌われると、次はハレルヤコーラスの輝かしい歌唱。そしてドヴォルザーク/スラヴ舞曲が4

曲で、まずは第1集から第1番ハ長調。平井が最も得意にする作曲家だけあって炸裂した。続いては第2集から2番、8番、7番。ことに2番は情緒纏綿とした名演。第2部はまず実行委員長で合唱指導&指揮の森厚氏による挨拶と合唱

指導のコーナー。「我は海の子」「みかんの花咲く頃」「赤とんぼ」といった名作を会場全員で。最後の團伊玖磨/混声合唱組曲「筑後川」では平井がオペラ指揮者の本領発揮。多彩で雄弁な表情付けが光った。(6月20日、いちようホール) (浅岡弘和)